

新刊紹介

著者	清水 建美, 中田 政司, 鳴橋 直弘
著者別表示	Shimizu Tatemi, Nakata Masashi, Naruhashi Naohiro
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	49
号	2
ページ	194-196
発行年	2001-12-28
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055408



新刊紹介

○ 北川高史 (監修)・伊藤ふくお:どんぐりの図鑑 B5 判, 79 頁, 2001 年 12 月 10 日, トンボ出版, 2,800 円 (税別).

環境保全や生物多様性保全をめざして自然観察会が全国的に盛んである。そんな時、大切なのはすぐれたガイドブックを持つことである。本書は著者の自らの観察体験に基づいて、どんぐりと呼ばれるブナ属 2 種、コナラ属 15 種、クリ、シイ属 2 種、マテバシイ属 2 種合計 22 種についてそれぞれの種の花被、柱頭、へそ、殻斗を徹底的に調べ上げ、たった 1 個のどんぐりでも種の同定を可能にした写真の記録であり、1 年成のどんぐりコナラと 2 年成のどんぐりクヌギの発芽および成長の過程を四季を通して比較観察した記録であり、22 種のどんぐりすべてを芽生え段階からどんぐり段階まで形を追った記録である。野外観察の折り、葉がないから、花がないから分からないといった言い訳をすることはよくあることだが、この本をひとくればこんな言い訳は恥ずかしくなってしまう。「紀伊半島で見られる不思議なドングリ」の項では、葉柄の長いアカガシ、鋸歯のあるツクバネガシ、裏が白くないウラジロガシが紹介されているなど、話題も豊富である。このようなガイドブックが次々にでることになれば、日本の自然観察のスタイルもぐんと進歩するに違いない。次の企画が出ることを心から期待したい。(清水建美)

○ 上赤博文:ちょっと待ってケナフ!これでいいのビオトープ? A5 判, 183 頁, 2001 年 11 月 16 日, 地人書館, 1,800 円 (税別).

紹介者の勤めている植物園にも、「環境にやさしいケナフを植えたいのでタネの入手方法を教えてほしい」とか、「子供たちが作ったビオトープに水草を植えたい何がよいか」といった相談が持ち掛けられる。もちろん本気で二酸化炭素を吸収させるとか、ビオトープによって環境を還元させるというわけではなく、ケナフ栽培や学校ビオトープ作りを通じて子供たちに体験的な環境教育を行うことが目的と理解しているが、何か流行のようにケナフとビオトープという言葉が使われることには抵抗を感じていた。よく検証を行わずにその土地のものでない植物を植栽すると、逸出野生化して生態系に影響を与える可能性もあるからだ。そんな折、教育の現場から警鐘を鳴らす本が出た。

タイトルはなかなか刺激的で、ケナフやビオトープの実践的な活動を行っている人は快く思わないかも知れないが、著者が最後に述べているように、これまで手探りで行われてきた活動に対して異なった視点から情報を提供して活動を支援することが真の目的であり、決して善意の活動を批判しているわけではない。実際、ケナフの植物としての特性やケナフをとりまく社会的な環境について豊富な写真と親しみやすいイラストを使って詳しく述べられており、ケナフを教材として利用する時の参考書として格好のものである。後半は帰化の問題から生物多様性の保全、ビオトープへと話題が展開するが、これは著者が地域フロラの研究者でもあり、教職のかたわら佐賀県の植物、特に絶滅危惧植物の多い水草について調査を続けてきたことがその背景にあるのであろう。ケナフやビオトープに関する参考文献やホームページが紹介されているのもありがたい。学校教育の関係者にはぜひお薦めしたい本である。(中田政司)

○ 楊 遠波・劉 和義・林 讚標:台湾維管束植物簡誌 第五卷 B5 判, 457 頁, 2001 年 4 月 30 日, 行政院農業委員会, 台北. ISBN 957-02-8361-0, NT\$1,000.

台湾の高等植物のカラー写真付き植物誌の五巻目である、この巻でこのシリーズは完結する。本文は中国語で書かれている。

本書は、種子植物門、被子植物亜門、単子葉植物綱を取扱っている。本の前半部は、科の説明、属の検索表、属の説明、種の検索表、種の説明(学名、台湾名、記載、ノート、まれに線画あり)からなり、後半部はカラー写真(295~421 頁)のグラビアである。この巻には当学会の会員藤本義昭氏の線画が掲載されている。

台湾産植物のほとんどが網羅されており、本文は字が大きくて読み易く、またカラー写真は、その植物の特徴を良く表わし、かつ綺麗である。第一巻 蕨類植物門(1997 年 ISBN 957-00-9832-5)、第二巻 種子植物門 裸子植物亜門 被子植物亜門 双子葉植物綱(1997 年 ISBN 957-00-9833-3)、第三巻 種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱(1998 年 ISBN 957-02-3224-2)、第四巻 種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱(1999 年 ISBN 957-02-5347-9)。これらの本は、三民書局(台北市重慶南路一段 62 号)と正中書局(台北市衡陽路 20 号)で販売している。(鳴橋直弘)

○ 石井英美・太田和夫・勝山輝男・城川四郎・崎尾 均・高橋秀男・中川重年・吉山 寛(共著), 茂木 透

(写真)：山溪ハンディ図鑑5 樹に咲く花 合弁花・単子葉・裸子植物 A判12取, 719頁, 2001年7月10日, 山と溪谷社, 3,600円(税別)。

高橋秀男と勝山輝男両氏の監修の「樹に咲く花」の第1冊目は離弁花①で2000年4月に, 第2冊目は離弁花②で2000年10月に, それぞれ出版され, 今回のものは第3冊目であり, これで“樹木”は完結されたことになる。

前回同様, 花や果実, 冬芽, 葉柄など同定に重要な形質の拡大写真はみごとである。特に, 針葉樹の球果, 種鱗と苞鱗, 種子, 針葉の比較写真は素人には有り難いものである。トネリコの仲間は今よく似ていて区別点のはっきりしなかったが, これだけそれぞれの種について比較写真を揃えてくれているので, 今後は同定がたやすくなるものと思っている。日本の樹木の同定にはこの3冊は非常に役に立つと考えられる。

3冊ともリュックに入れて野外にでるには重いので, 結局机上での使用となる。そうすると, もう少し大判にし, 見やすくしてくれたら, もっと利用価値が上がったかもしれない。(鳴橋直弘)

○ 清水建美：植物用語事典 A5判, 323頁, 2001年7月30日, 八坂書房, 3,000円(税別)。

図や写真を多く取り入れ, 花, 葉, 茎, 根などに分けて, 植物の外部形態を主とした用語の解説書である。

本書は, 植物群を表わす用語, 習性によって分けた植物の用語, 花に関連する用語, 果実に関連する用語, 葉に関連する用語, 茎に関連する用語, 芽に関連する用語, 根に関連する用語, 生殖に関連する用語, および付録として, 形やつき方・質を表わす用語, 突起や毛・腺に関する用語, 日本産種子植物からなっている。

植物の記載を読んだり書いたりする時に, 佐竹義輔(1964)の「植物の分類」や小野幹雄他(1989)「牧野新日本植物図鑑」の植物の用語図解を参考にされた人も多いと思う。古くは朝比奈泰彦・清水藤太郎(1931)の「植物薬物・学名典範」や最近の豊国秀夫(1987)の「植物学ラテン語辞典」は英語やラテン語の日本語への翻訳には便利であるが, どんな形のものか, 絵や写真がないので安心できなかった。そんな時, この本は図説されているので, 用語の理解にはとても便利である。

初心者に分りやすく書かれているためか, 用語数約1,200は幾分少なく, 少し物足りなくも感じられる。本文中の用語の説明文や例として挙げられている植物の中に, やや適切でないかとも思われるようなものが見られたりしたが, 図は鮮明で分りやすく, 多くの写真があるため, 植物に関心のある者にお勧めしたい本である。(鳴橋直弘)

○ レッドデータブック近畿研究会(編著)：改訂・近畿地方の保護上重要な植物 —レッドデータブック近畿2001— A4判, 164頁, 2001年8月31日, 平岡環境科学研究所, 3,000円(税込み, 送料別)。

1995年に出版された黄色がかった赤色表紙の「近畿地方の保護上重要な植物」の改訂版である。

本書は, 総論, 近畿地方の植物, 保護上重要な植物のカテゴリーと選定経過, 保護上重要な植物の生育環境, 各府県の現状と保護上重要な地域, 保全への課題, 近畿地方の保護上重要な植物目録, 近畿地方の保護上重要な植物の分布情報と生育環境, 近畿地方の保護上重要な植物のカテゴリー別種名一覧, 近畿地方の植物の保護上重要な地域等からなる。

今回の改訂版は, 150名以上の人々からの分布情報や, 標本, 文献, 現地調査によって出来たと言う。文献の充実, 前版掲載種の入れ替え, 植物名の変更, 植物に対するカテゴリーの適切な評価, が行われている。また, 現状と保護上重要な地域(31~88頁)は, 巻末見開きの地図と共に, 分りやすく整理されている。

入手希望者は, 〒215-0001 神奈川県川崎市麻生区山8-8 平岡環境科学研究所 TEL 044-955-8379 FAX 044-955-5476 「近畿レッドデータブック」係(担当 本郷)に申し込んでください。(鳴橋直弘)

○ 長谷川順一：宇都宮市の植物 B5判, 299頁, 2001年10月25日, 自費出版, 5,400円。

永年にわたって地元の植物を研究されてきた長谷川順一氏が, 宇都宮市の高等植物をまとめたものである。

本書は, カラー写真, 主要調査地の地名と位置, 宇都宮市地図, 宇都宮市の自然と植生, 宇都宮市植物目録, 類似種の見分け方, 絶滅のおそれのある野生植物, 研究史と自然保護断想, 参考文献からなる。

前半部のカラー写真(9~96頁)計661点は, 生態写真が主で, 花が際立っており, みごとな写真が揃っている。生育環境にも配慮して撮影されたものが多く, 植物の理解や同定に大いに役立つ。また, 各写真の植物名とそれに付け加えられている文章は良く考えられている。主部である植物目録は, 各植物ごとに, 和名, 学名, 市内の産地名, それに1行のノートからなっている。著者の未見種には*印が付けられ, 文献が載っている。これらのリストの裏付けとなる標本の大部分は栃木県立博物館に収蔵されているという。目録は信頼

できるものと思われる。宇都宮市には自生しないが、公園や街路に植栽されて目立つ樹木は△印を付けて挙げられているので、利用者には便利である。

入手希望者は、北村書店（宇都宮市中戸祭 1-1-20 TEL 028-622-1450）、またはオーレリアン（宇都宮市宮町 2-16 TEL 028-621-1164）から購入されるか、直接著者（〒320-0052 宇都宮市中戸祭 767-2 TEL 028-622-4430）に申し込んでください。（鳴橋直弘）

○ 岡 国夫・勝本 謙・見明長門・三宅貞敏・真崎 博：山口県産高等植物目録 A4判, 92頁, 2001年11月3日, 山口県植物研究会, 1,000円（送料込み）。

1972年に出版された岡 国夫他著の「山口県植物誌」の植物目録部分の改訂版である。

本書は、参考文献、目次、高等植物のリスト（環境庁自然保護局の植物目録修正版1994のコード番号、学名、和名、普通、稀、ごく稀などの分布状況、あればノートとして北限、逸出、帰化、原産地が記載されている）からなる。

1972年の山口県植物誌はその後の県別植物誌の範となった本で、出版後30年近い年月が経った現在、その改訂版が強く望まれていた。今回は植物目録という限定された形で刊行されたが、熱心な山口県下の植物研究家の努力で、その目録の内容はしっかりしたものである。県別植物誌に興味のある人には、ぜひお勧めしたい本である。

入手希望者は、〒744-0002 山口県下松市上豊井万福寺 真崎 博 TEL 0833-41-3495 に直接申し込んでください。（鳴橋直弘）

○ 長崎県生物学会（編）：多良岳の生物 A4判, 192頁, 2001年12月1日, 長崎出島文庫, 2,200円（税込み）。

長崎県生物学会創立30周年記念として出版されたこの本は、長崎県と佐賀県の県境にある標高1,000mに近い山である多良岳の総合的な学術調査に基づくものである。

本書は、カラーグラビア、自然環境、植物、動物、その他からなり、その内の植物では、コケ植物、シダ植物、種子植物、草原の植物、岩場の植物、多良山系を正基準標本産地とする植物、ラン科植物、鳥甲岳のツガ林、植生、巨樹・巨木、ブナ林、植物天然記念物の項立で、それぞれ数頁を割いて書かれている。

多良山系は九州西部の数少ない冷温帯林で、分布の西限となっている植物（ブナ、シオジ、マンサク、カツラ、サワグルミ、チドリノキ、ヤマシグレ、カジカエデ、サバノオ、モミジガサ、ユリワサビ、ヤマジオウ、ミヤマタニソバ、タチネコノメソウなど）も多く、それらの紹介とともに、多良山系の主要植物目録も掲載されている。この本は、地理、動植物、自然観察と多岐に渡っているため、各項目の記述はやや少なくなっている。できるならもう少し書き込んでほしかった。

多良岳は、ホソバナコバイモの調査で登ったことがある筆者には懐かしい山である。その山の生物的自然を1冊の本にコンパクトにまとめてあり、多良岳に関心のある読者には好都合な本であると同時に、付近の学校の生徒等への教育的効果も高い本である。（鳴橋直弘）